

調査の概要

別紙 1

1 調査対象校（国立を除く全公立学校）

小学校 565校（分校も1校とカウント。3年生以上不在の1校を除く）
中学校等 245校（分校も1校とカウント。県立中学校1校、中等教育学校前期課程5校を含む）
高等学校等 103校（定時制・分校も1校とカウント。中等教育学校後期課程2校を含む）

2 調査期間

平成19年5月から7月まで

3 調査内容

小学校3年生以上は8項目を指定し、中学生以上は選択種目を含む9項目で調査した。

項目要素	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	シャトルラン	50m走	立ち幅とび	ボール投げ
	筋力	筋力 筋持久力	柔軟性	敏捷性	全身 持久力	全身 持久力	北・ド	瞬発力	巧緻性 瞬発力
区分									
小学校3年生以上					-				
中学・中等教育・高校					選択 ←	→ 選択			

4 比較・分析対象

- (1) 小学校では、3年生以上で実施した8項目を対象とした。
- (2) 中・高等学校では、持久走とシャトルランのうち、実施人数の多い方を指標とすることとし、中学校等では平成15年度からシャトルランを、高等学校等では平成18年度までは持久走を、平成19年度からはシャトルランを対象とした。

5 全国平均値との比較（別紙2）

- (1) 小学校
 - 男子は、握力、長座体前屈、反復横とび、シャトルラン、立ち幅とびが、ほとんどの学年で全国平均値以上であるが、50m走とソフトボール投げがほとんどの学年で全国平均値に達していない。
 - 女子は、ほとんどの項目が全国平均値以上であるが、50m走とソフトボール投げで全国平均値に達していない学年がある。
- (2) 中学校等
 - 男女とも、握力、上体起こし、長座体前屈、立ち幅とびがほとんどの学年で全国平均値以上である。
 - 男女とも、シャトルラン、50m走、ハンドボール投げがほとんどの学年で全国平均値に達していない。
- (3) 高等学校等
 - 1年生は男女とも、長座体前屈、反復横とび、シャトルラン、立ち幅とびが全国平均値以上である。
 - 2、3年生では、男女とも多くの項目が全国平均値に達していない。

6 平成15～19年度5年間のTスコアの変遷（図1～3）

図1～3は、平成15年度の8項目の全国平均値をそれぞれ50に換算し、合計400としたとき、平成15年度から平成19年度の県平均値と平成16年度から平成19年度までの全国平均値を、標準偏差を用いた共通のものさし（Tスコア）を使うことで、各校種ごとの経年変化を比較したものである。

(1) 小学校

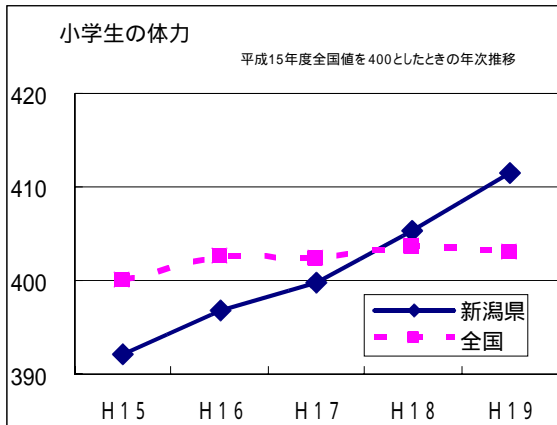
- 全国合計値は、横ばいである。
- 県合計値は年度ごとに上昇し、平成18年度に全国合計値を超え、平成19年度はさらに上回った。

(2) 中学校等

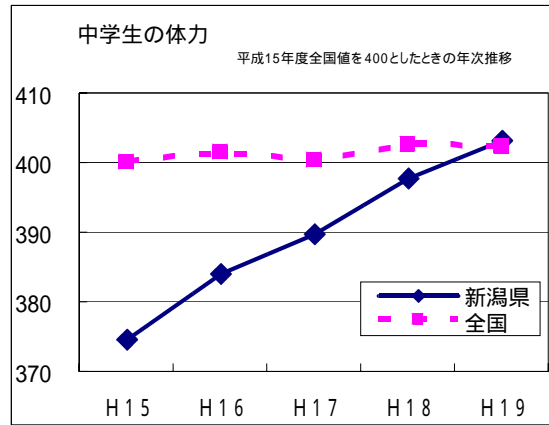
- ・ 全国合計値は、横ばいである。
- ・ 県合計値は、平成15年度では全国合計値との差が大きかったが、順調な伸びを示し、平成19年度には全国合計値を超えた。

(3) 高等学校等

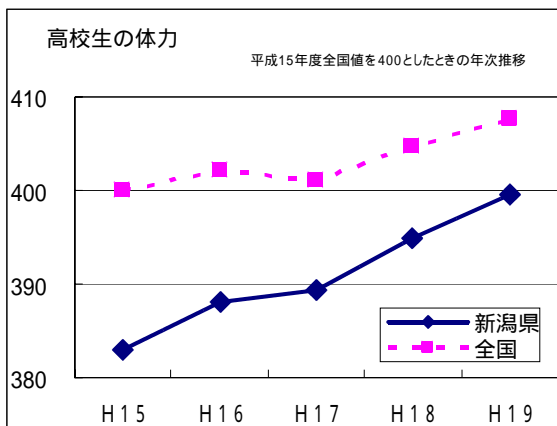
- ・ 全国合計値は、平成18年度から上昇傾向が見られる。
- ・ 県合計値は平成16年度以降順調に伸び、全国合計値に近づいている。



(図 1)



(図 2)



(図 3)

7 考察

- (1) 県の児童生徒の体力は、各学校の取組により、年々向上しており、全国平均値以上の学年が増えている。(調査の概要5、別紙2)
- (2) 各学校で体力テストのデータを活用し、自校の実態に合わせた取組を行うことにより、バランスよく体力が向上していると思われる。(別紙2)
- (3) 各校種での発育発達段階に応じた具体的な取組の実践により、高等学校においても全国平均値以上の項目が増えはじめ、Tスコアも全国値に近づきつつある。
- (4) 全国的な児童生徒の体力・運動能力の課題は、児童生徒の体力が最も高かった昭和60年頃と比べ、全身のパワーを使った運動能力の指標である50m走やボール投げの低下である。このことは、体格が大型化しているため、身体の大きさに見合ったパワーを発揮することが弱くなっていることが原因と考えられる。そこで、新潟県教育委員会では、早い時期から運動に親しみ、身体の基本的な動きを総合的に身に付けることが必要であると考え、ガイドライン等の見直しを含め検討する。

平成20年度の全国平均値は、平成21年10月に文部科学省から発表される。
平成20年度の県平均値の速報版は、平成21年1月末に発表される。